様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　６ 日現在

機関番号：８４４１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００１８０

研究課題名（和文）中世寺社景観図の研究

研究課題名（英文）Studies on Images of Temples and Shrines in Chusei Period

研究代表者
泉　万里（Izumi, Mari）

公益財団法人大和文華館・その他部局等・学芸部長

研究者番号：６０２４３１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：従来寺社を描く中世絵画や絵図類は、地域の歴史を知るための情報源として活用されてきた。しかし、とくに絵図に関しては、その制作時期すら曖昧な場合が多い。本研究では「出雲神社絵図」など中世の絵図を、美術史の作品研究の俎上にのせ、制作時期と描写内容、制作背景について新知見を提示した。中世の絵図には、寺社とそれを支える人々の歴史意識が投影されていることも、あわせて指摘した。さらに、15、16世紀の、絵図類と「笠置寺縁起絵巻」など地方寺社の縁起絵巻類には、モチーフや表現面の共通点が多いことに着目し、それを、中世画壇の底辺近くで活動する絵師たちが共有していた中世絵画の一様式であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来歴史地理学の研究対象であった絵図類を美術史の研究対象とすることで、中世絵画の研究領域を拡張した。そして、絵画史的検討を加えることで、絵図にこめられた歴史意識を発掘することにも成功した。これが本研究の最大の学術的意義である。社会的意義としては、地方の社寺等で保管され、美術史が研究対象としてこなかった作品の絵画史的位置づけを行い、展覧会での公開や図録および研究成果報告書による論文発表を通じ、所蔵者および地域の人々の作品に対する認識を深めることに寄与したことを挙げたい。

研究成果の概要（英文）：Maps of medieval temples and shrines and their surrounding areas have been used by historical geographers as materials to tell the history of the area. However, research on the pictorial map itself has not progressed. Therefore, in this study, I took up multiple pictorial maps, and reviewed them as medieval paintings, to think about when they were depicted, and what was the purpose of them. As a result, pictorial maps have been thought to project the actual landscape of the time they were drawn, as do modern maps, but in reality, the history of the temples and shrines depicted.
In addition, the pictorial maps and the picture scrolls of the legend of local temples represented by "Kasagi-dera Engi Emaki" use common motifs and similar brush strokes. I paid attention to it and regarded it as the style of the painters who were active in the region. They appear to have been active at the bottom of the medieval painter, but pointed out that their powerful expressiveness has a unique appeal.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本中世絵画　寺社景観図　縁起絵巻　素朴絵

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
（１）日本絵画史における中世やまと絵研究は、宮廷絵所絵師やそれに準ずる一流の絵師の稀少な作品を中心に研究が進められてきた。しかし、いっぽうで、絵画史がこれまで研究対象としてこなかった作品も多く残されている。そうした作品に早くから注目していたのが、宮次男氏である（「中世絵巻の展望」『MUSEUM』284 号）。宮氏が説くように、南北朝時代以後に、庶民に親しみを覚えさせるような、あたたかみのある、稚拙な様式の絵巻や縁起絵が増加する。その種の絵画として、地方の寺社で作成された絵図類を加えることもできよう。近年、それらの朴訥な様式の絵画を「素朴絵」と総称して、再評価する機運はあるものの、依然、個々の作品についての調査研究は進んでいない。つまり、中世の日本絵画研究において、研究が著しく遅れていたのが、中世の寺社の絵図や、縁起絵類であった。
（２）いっぽうで、中世の寺社絵図は、近年、歴史地理学研究において活用が図られ、国立歴史民俗博物館や東京大学史料編纂所などが中心となって、全国規模の絵図の調査が実施され、良好な図版集の公刊が継続中であった。ただし、そこでの関心は、絵図と現地の地形状況や、その地の歴史的事象との照合に向けられている。それは、絵図を情報源として扱うものであり、絵図そのものについて、いつ制作されたのか、あるいはいつ、どのような原本から写し取られたものかといったことについての判断が保留されている場合も少なくない。そこに絵図の絵画史的作品研究の余地が残されていた。

２．研究の目的
（１）中世絵画研究の対象を拡大して、より多くの作品を美術史研究の俎上に乗せる。それによって、中世の絵画と人々との関わりを、より広く捉えることが可能となる。
（２）研究者間で推定制作時期が大きく分かれる作品や、後世の偽作と疑われることもある作品など、問題のある作品を優先的にとりあげて、個別作品研究を深め、美術史研究の観点から作品の再評価を進める。
（３）地方で作成された絵図や縁起絵を調査し、比較することで、中世の素朴な絵画の様式を把握する。

３．研究の方法
（１）作品の実地調査をもとに、絵画様式の分析をし、描かれている寺社の歴史的背景にも目を配り、多角的に検討を行い、可能なかぎり明快な結論を提示する。さらに、描かれている寺社へ実際に足を運び、現在の、その土地の景観を把握して、描かれている内容の理解を深める。
（２）研究期間の中程で展覧会を開催する。その準備作業中に、作品を保管する博物館関係者や、地元研究者からの情報収集をし、会期中は来場者との意見交換を行う場として展覧会を活用する。

４．研究成果
（１）本研究によって従来曖昧にされていた制作時期をほぼ確定できたのは、「出雲神社絵図」（出雲大神宮蔵）、「東山泉涌律寺図」（泉涌寺蔵）、「摂州細川荘絵図」（池田市立歴史民俗資料館蔵）、「高野山図屏風」（堺市博物館蔵）、「笠置寺縁起絵巻」（笠置寺蔵）の 5 件である。「出雲神社絵図」については、室町時代 15 世紀の偽作説を否定し、南北朝時代に鎌倉時代の絵図であるように装って、古文書とともに偽作された絵図であると推測した。また、近年、鎌倉時代の絵図という見方がなされていた「東山泉涌律寺図」は、絵画様式と、描かれている塔頭の存廃状況から、室町時代 15 世紀半ばの絵図であることを指摘した。さらに、武田恒夫氏によって 16 世紀前半に制作されたものという見解が示されていた「摂州細川荘絵図」については、その制作目的を、そのころ（天文年間）にさかんになっていた植木産業の由緒の主張にあると推測した。さらに展覧会で、中世の「高野山水屏風」（京都国立博物館蔵）にはじまる高野山図の系譜につらなる江戸時代の屏風として展示した「高野山図屏風」（堺市博物館蔵）についても、19 世紀とされていた制作時期をみなおした。江戸時代に幕府に数次にわたって提出された高野山絵図を調べ、壇上伽藍の建物の焼亡と再建の歴史を追って、同屏風の制作時期が 18 世紀に遡ることを論証した。また、「笠置寺縁起絵巻」の制作時期について 15 世紀後半説が有力視されていたが、詞書の筆跡が同寺に残る縁起のテキストを天文 7 年（1538）に写した写本と同じであることを確認し、絵巻もそれとほぼ同時に描かれたものであることを明らかにした。
（２）14 世紀の「高野山水屏風」（京都国立博物館蔵）から、16 世紀の「高野山曼荼羅」（東京藝術大学蔵）と「かるかや」（サントリー美術館蔵）、そして、江戸時代 18 世紀の「高野山図屏風」（堺市博物館蔵）にいたる 4 作品を比較検討することで、中世後期から近世にかけての、寺社参詣の大衆化が、高野山図を大きく変質させていることを指摘した。有力子院の漠然とした集合体としての高野山の風景が、参詣道で各地点を繋いで表される高野山図へという変化をそこに捉えることができるが、それは、江戸時代の版本による名所案内の挿図とも密接に連動する。
（３）南北朝時代以後に増加するいわゆる「素朴絵」を様式概念とすれば、本研究で扱った作品

の多くがその範疇におさまる結果となった。そこで、それらのなかから、「摂州細川荘絵図」（池田市立歴史民俗資料館蔵）と「笠置寺縁起絵巻」（笠置寺蔵）とを比較して、中世の正統的な絵画の修練をうけていない、無名の絵師たちが共有する様式の特徴と傾向を捉えた。絵画を見慣れていない庶民の共感を呼ぶわかりやすさが、この様式の身上である。そのため、「吹き抜き屋台」は使われないし、霞による距離感の表出や、時間の経過の表現もみられない。言い換えれば、そうした伝統的な物語絵画の表現方法は、絵を見る側にもそれなりの訓練と知識が要求される高度なものであるとわかる。そして、両作品を比較して浮かび上がるのが、水墨画風モチーフの多用や、水墨画風の山水表現の多用である。この特徴は、「笠置寺縁起絵巻」とほぼ同時代の、地方の寺社の縁起絵巻、たとえば「大山寺縁起絵巻」（平塚市博物館蔵）や「大覚寺縁起絵巻」（尼崎・大覚寺蔵）、そして、新出の「源義経一代記図屏風」（個人蔵）などとも共通する。すなわち、中世後期の無名の絵師の間で、水墨画風の表現は、それなりに画面にまとまりをつけることができ、かつ、絵具の節約にもなる便利な方法として浸透していたことを推測できる。

（４）当初の計画どおりに、2019 年 10 月 5 日～11 月 17 日を会期として、勤務先の大和文華館にて特別展「聖域の美　中世寺社境内の風景」を開催した。この展覧会は、本研究の中間成果発表である。一年半を準備期間にあて、寺社の景観をとらえ、絵図的、境内図的性格をあわせもつ中世絵画と、それを継承する近世絵画などあわせて 34 点を選択し、公開した。会場の作品キャプションおよび展覧会図録の作品解説には、2019 年 7 月時点までの本研究の成果を反映させた。本展開催によって得られた最大の成果は、従来郷土史の資料とみなされていた絵図類を、はじめて美術館の壁面に掛け並べた点にある。それによって、絵図類は、郷土史の情報源であるとともに、一点一点が、かけがえのない、貴重な中世絵画でもあるという認識を観覧者をはじめ、展覧会開催のために協力を得た研究機関や研究者の間で共有できた。観覧者数は 6000 人程度であったが、詳細な作品解説と論文 2 本を掲載した展覧会図録 1000 部は、会期中に完売。

（５）2021 年度には、当初の計画どおり紙媒体の研究成果報告書『「中世寺社景観図の研究」研究成果報告書　中世寺社境内の風景』を 200 部刊行し、各地の公立図書館、研究機関、研究者に配付した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 泉万里	４．巻 1503
２．論文標題 出雲神社絵図	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国華	６．最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 泉万里	４．巻 134
２．論文標題 江戸時代の高野山図屏風（堺市博物館蔵）について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大和文華	６．最初と最後の頁 13,25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

（１）展覧会図録『特別展　聖域の美　中世寺社境内の風景』大和文華館　2019年
（２）課題番号18k00180「中世寺社景観図の研究」研究成果報告書『中世寺社境内の風景』2022年3月1日刊行（200部）報告書内容は以下のとおり。「序」4～10頁、「高野山の風景」11～28頁、「出雲神社絵図　神領と由緒の証し」29～49頁、「東山泉涌律寺図　宋風伽藍の200年」51～91頁、「摂州細川荘絵図　水墨画風表現の浸透」93～113頁、「笠置寺縁起絵巻とその絵師」115～151頁、「初出一覧」153頁　奥付154頁

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	古川　攝一 (Furukawa Shoichi) (70463297)	公益財団法人大和文華館・その他部局等・学芸部員 (84419)	2019年度まで。2020年5月削除承認

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	都甲　さやか (Toko Sayaka) (80706755)	公益財団法人大和文華館・その他部局等・学芸部員 (84419)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関